

国語学史のなかの京都

石井久雄

まさにこの用紙に向かって筆・墨で書き記した人がいる。その姿勢や息遣いといったものが、筆写本に向かったときには感じられることがある。板行本など印刷したものでは経験することができない感覚である。この家で人と語り合ったり食べたり寝たりしながら、考えて原稿を記した人がいる。あるいはこの道を歩きましたであろう。学に携わっていて先人の旧宅などを尋ねたときに、初めて得られる感覚である。この人に何かを尋ねてみたいという思いが、墓碑の前に立つと湧いてくる。国語ないし日本語の解明に当たった人びとが日びを過ごした、その場を、近世の京都のうちに訪ねてみたい。

富士谷成章 ふじたに  
なりあきら

京都に暮らして国語に深い見識を示した、最大の学者として、富士谷成章を挙げたい。一七三八年文三年、福岡県柳川藩の京屋敷の医家・皆川 みながわ 家に生まれ、やはり京都の柳川藩士・富士谷家を継いだ。京都御苑のすぐ西、中立売通西洞院西入に住み、現在の京都府林務事務所の西北隅に「富士谷成章宅址」の碑が立つ。

国語学では『挿頭抄 かざし』『脚結抄 あゆい』を残している。「挿頭」は副詞・接続詞類、「脚結」は助動詞・助詞類であり、「名 な」の名詞類、「装 よせい」の動詞・形容詞類とともに、成章が語を文法的に大分類したものである。「抄」は解説を意味する。つまり、例えば、『脚結抄』は助動詞・助詞の解説書である。『脚結抄』序文は、国語史の時代区分を述べ、用言の抽象的な活用表を掲げるなど、江戸時代に屹立する国語把握を示した。

成章は、一七七九安永八年に四十一年の生涯を閉じた。墓碑は、住居の北西方向、道のりで三キロメートルほどのところ、京都市北区、千本通鞍馬口の上品蓮台寺にある。ただし、堂舎とは千本通を挟んだ反対側に墓地があり、門もあって、その前に「富士谷先生碣」の碑が堂堂と立つ。「碣」は音ケツ、意味は碑、富士谷家当代によって立てられた。

成章の墓碑の周囲には富士谷一族の墓碑が並び、長男・富士谷御杖 みつえ のものもある。御杖は一七六八明和五年生、一八二三文政六年没、国語についての著作として、当代語から古語を引く、最初の辞書『詞葉新雅 ことばのしんが』を編んだ。門前の碑の「先生」は、御杖を含むであろう。

成章の実兄・皆川淇園 きえん は、一七三四享保一九年生、一八〇七文化四年没。当時を代表する儒学者また文人である。言語について独特の論をもち、漢語・漢字に即して『虚字解』『実字解』を著しもし、成章にも影響を与えた。成章宅よりはさらに御所に近い中立売通室町西入に住み、また私塾・弘道館を設けて、門弟数千を育てた。一筋南の上長者通の側に、「皆川淇園弘道館址」の碑がある。大きく立派な墓碑が、京都御苑の北、寺町通の阿弥陀寺に、門弟によって建てられている。

本居宣長 もとおり  
のりなが

成章があと二十年生きていたならば、本居宣長が国学を集大成するのを見たはずである。宣長は、現在の三重県松阪市に一七三〇享保一五年に生まれ、一八〇一享和元年に没した。暮らした家も松阪城址に移築・保存され、記念館も設けられ、市街でも至る所に宣長が感じられる。その宣長は京都を幾たびか訪れた。

宣長は、数え二十三歳一七五二宝暦二年からの五年半、漢学・医学修得のために遊学し、それを記念する碑が立てられた。京都御苑西側を通る烏丸通をJR京都駅に向かって南下すると、半ばで四条通と交わり、その交差点から見て南西のほうに碑がある。「本居宣長先生修学之地」「堀景山宅 綾小路通室町西入南側 武川幸順宅 室町通綾小路北上」

その他が記されている。堀景山<sup>ほりけいざん</sup>は、漢学者であるが国学にも通じ、宣長は二年半をその塾に寄宿して、得るところが大きかった。その後、寄宿したのが、小児科医学の師・武川幸順<sup>たけがわこうじゆん</sup>の塾である。洛中の所在は、景山宅で言うならば、正門ないし玄関が「綾小路通」に面し、近辺の「室町」通との交差点から「西」に「入」ったところにある、というように示すから、宣長は北東に引越したことになる。碑が立つのは、現在は大島紬の柵儀ビルの玄関先、かつては景山の塾の門前である。畢生の大作『古事記伝<sup>こじき</sup>』を著すには、宣長は国語を解明しなければならなかった。鎌倉時代以降、理解され難くなっていた係結び・係助詞を『てにをは紐鏡<sup>ひもかがみ</sup>』、『詞玉緒<sup>ことばのたまお</sup>』で整理し、その発展として『活用言の冊子<sup>かつようげんの</sup>』で用言の活用を整理した。『字音仮字用格<sup>じおんかなづかい</sup>』、『漢字三音考<sup>かんじさんおんこう</sup>』、『地名字音転用例<sup>ちめいじおんてんようれい</sup>』で日本における漢字音の研究も遺した。景山の下に寄宿してから五十年を経、宣長は、烏丸通を東に渡った宿で、門人に講義を行った。「鈴屋大人偶講学旧地」の碑が、烏丸通四条南東角のビルの、烏丸通に面した裏口に立っている。鈴屋<sup>すずのや</sup>は宣長の号。二箇月半の滞在の後、松坂に戻って三箇月半、宣長は永眠した。

## 本居と富士谷

宣長が遊学していたころ、成章はまだ皆川姓である。二人の住まいは二・五キロメートル程度の距離であったと思われるものの、どこかで袖が触れ合ったかいなか。宣長は『脚結抄』に接して高度な内容に驚嘆するが、恐らく成章没後のことである。

宣長は、一七六三宝暦一三年生まれの息・春庭<sup>はるにわ</sup>に期待を寄せていた。春庭は優秀であった。しかし失明し、一七九五寛政七年、針医修業のために上京する。寄宿したところは、富士谷家の西、百メートルと離れていないあたりである。寄宿は二年間に渡り、記録は見出だされていないが、春庭と御杖とは会いはしなかったか。春庭は、松坂に帰った

後、『詞八衢<sup>ことばのやちまた</sup>』で動詞の活用体系を明察し、『詞通路<sup>ことばのかよいじ</sup>』で動詞の派生を追究した。動詞の活用体系の把握は、父の成果を受けて今日の活用表に骨格を与えたものであり、派生の問題は、今日なお挑戦者がいない。一八二八文政十一年、春庭は没した。

宣長は、商家の出であり、修行のために江戸の叔父のもとに行ったが、意に染まずに一年で帰郷した。その分の江戸嫌いは差し引かなければならないとしても、宣長が遊学して成果を得られるほどに、学問の魅力はまだ京都に溢れていたのである。元禄が終わって化政に移ろうとするころにも、言い換えるならば文化が上方から江戸に中心を移そうとするころにも、京都はそのようなところであった。

## 近世前期の漢学

時代を遡れば、京都は、学問的な営みの中心としての性格を更に強くしてゆく。市中を歩いて、そのようなことに気付かされることもある。曲直瀬道三<sup>まなせどうざん</sup>は、戦国時代の名医であり、日本最初の医塾・啓迪院<sup>けいてきいん</sup>を創設して八百人の塾生を育てもした。一五〇七永正四年生、一五九四文禄三年没。淇園が眠る阿弥陀寺の南に十念寺が隣り、その門前に「曲直瀬道三墓所」の碑が立つ。墓碑は苔生して崩れんばかりであるが、墓所の入り口には、没後四百年を記念して日本医史学会等が「曲直瀬道三顕彰碑」を大きく据えている。墓碑の傍らには、道三に師事した施薬院全宗<sup>ぜんそう</sup>（一五二六永永六年生、一五九九慶長四年没）も葬られている。なお、啓迪院があった場所は、淇園の弘道館が後に設けられる地の西隣であったかもしれない。

道三は、幼くして両親を失い、十歳で相国寺に入って、群馬の足利学校に学ぶなどした後、四十歳で還俗して医業に専念した。藤原惺窩（一五六一永禄四年生、一六一九元和五年没）も相国寺に入って朱子学・陽明学を修め、その門から林羅山・那波道円・松永昌三（一五九二文禄元年生、一六五七明暦三年没）・堀杏庵の四天王らが輩出している。惺窩

の流でなくとも、山崎闇齋（一六八一元和四年生、一六八二天和二年没）、伊藤仁齋（一六二七寛永四年生、一七〇五宝永二年没）らがいた。現在の二条城のあたり、東の堀川通に沿って、かれらの私塾跡の碑が並んでいる。「松永昌三講習堂址」「山崎闇齋邸址」「史蹟伊藤仁齋宅古義堂址並書庫」である。仁齋門の並河天民（一六七九延宝七年生、一七一八享保三年没）の「儒医並河天民講学所堀木之舎址」もこの並びである。昌三門の木下順庵（一六二一元和七年生、一六九九元禄一年没）は、宣長が学んだ景山の塾から見ると四条通を挟んで反対の北に住み、現在は「此附近木下順庵邸址」の碑がある。なお、景山は堀杏庵の曾孫である。

いま出した名のうちで、道円（一五九五文禄四年生、一六四八正保五年没）は、源順みなもと『和名類聚抄わみなよう』の校訂・刊行に携わって、現在も流布する本文を提供し、国語学史でも忘れられない人となった。『和名類聚抄』は一〇世紀に成立したいわば百科事典であり、後世の辞書は、平安時代の言語・事物を記す際にこれを典拠とし続けてきている。

## ひと休み

古義堂跡から少し北上して下長者町通に出、左手すなわち北のほうに成章旧宅を意識しながら東に進めば、烏丸通にぶつかる。烏丸通を渡れば蛤御門である。古義堂から一キロメートルもない。蛤御門から東に進む道は、京都御苑を南北に二分する。御所を左手に見た後は、右手に仙洞御所・大宮御所を見る。その北部には、平安時代初期に紀貫之の邸宅があった。さらに東に進んで清和院御門を出、寺町通を少し北上すれば、廬山寺がある。紫式部の邸宅であり、源氏物語執筆の場とされている。貫之も式部も、国語学史上の人物ではないが、国語の文章の様式を創った人であり、どのように創ったかを語ることができれば、国語との対決として、国語学史のなりえたいはずである。貫之も加わった梨壺の

五人が、どのように万葉集の言語に対したかは、ここではもはや想像しない。

国語の表記や漢語・漢字・悉曇の受容に伴う国語認識についても、触れないこととする。そのような条件のもとで、国語学史で確かに名を遺す人は、藤原定家ふじわらのさだいえ（一一六二応保二年生、一二四一仁治二年没）であるかと思う。平安時代の初期に発音に従って仮名が成立したところが、平安時代末期までには、文節中のハ行音がワ行音に転じたり、元もとのものも、その新たなものも、キエヲがイエオと同じ音になったりして、仮名の使いかたに多様性が出てきていた。多様なものを、本来あるべきであったはずの一つに統合したい、というのが、提起された問題である。定家のみが気づいたわけではなかったが、名前の大きさを定家が引き合いに出される。定家が解決した結果は、五百年後に契沖が覆すまで、権威としての地位を保った。定家邸は、寺町通を京都御苑南端よりもさらに三百メートル余り南下したところにあった。「此附近藤原定家京極邸址」の碑が立っている。

定家の墓碑は、相国寺で、足利義政・伊藤若冲と並んでいる。相国寺は、上に曲直瀬道三・藤原惺窩が入ったところとしても触れた。京都御苑の北側に今出川御門があり、東西に走る今出川通を渡れば相国寺山門、北西には冷泉れいぜん家がある。冷泉家は、言うまでもなく定家の子孫であり、この一帯に広く土地をもっていた。その土地を相国寺に寄進したときに、邸内にあつた定家の墓地も併せて相国寺に移ったという。相国寺は、京都五山を形成した大寺であつて、今出川通の西・東に位置する鹿苑寺金閣・慈照寺銀閣を塔頭としている。

## 鴨東藪父おうとうのそくふ

発音には新たな変化も加わった。江戸時代が始まるうとするころには、アウ・オウという二種に由来する長音が、統合されて一種のオーになる。別個の四音であつたジヂズヅも、二音「ジヂ」「ズヅ」にまとまる。と

いう二種類が、大きい変化である。仮名をどのように遣い分けるかという解決は、辞書に似た形式による。

鴨東蘇父は、一六九五元禄七年に、ジヂズヅを扱って『仮名文字使規縮涼鼓集かなもじづかい』を著した。開巻の解説では、音声についての優れた観察力を發揮している。しかし、この著者の人と為りが杳として知られない。「鴨東」が鴨川の東を指すから、そこに住んでいたのであろうと、それだけが広く認められている。

#### 伴蒿蹊ばんこうけい

四条通から五百メートル余り北上すると三条通であり、三条通で烏丸通から二百メートル東進したところに、かつて日本銀行京都支店があった。建物は古代学協会が買い取って平安博物館とし、京都府が寄附を受けて今は京都文化博物館である。日本銀行の前は何があったか。

伴蒿蹊は、一七三三享保一八年、このあたりの商家に生れた。その商家は滋賀県近江八幡市の伴庄右衛門家を本家とし、蒿蹊は八歳で本家の養子となった。家督を十八歳で継ぎ、三十六歳で譲った。近江八幡市の家屋は、明治になって小学校舎として寄附され、現在は市立資料館の一部を構成し、旧伴家住宅として公開されている。近江八幡市では蒿蹊は文筆活動を行わなかったが、その後半生の功績を称えて、旧伴家住宅の門を入ったところに、「国学家伴蒿蹊宅址」の碑が立てられている。

蒿蹊は、隠居して京都に戻り、ただ、市街の生家には戻らず、鴨東で文筆の生活を送っている。国語については『国文世々の跡くにのあと』を著し、散文の文体の分類・歴史という研究を開拓した。一八〇六文化三年没、知恩院に「閑田廬幽蒼蒿蹊操山居士」と刻んだ墓碑がある。「閑田」は別号である。伴一族は、近江八幡の本家もここ知恩院の墓地の中腹の一角に眠るように見え、人それぞれに墓碑があつて「〇代庄右衛門」といった札が立てられる。卒塔婆も当主が新しく調べているようで、私には非常に美しい墓所であると思える。二十基は並んでいるであろう墓石

のなかで、蒿蹊もその一つに過ぎない。

なお、知恩院墓地には湯川秀樹博士が眠る。学術研究の一つの頂点に辿り着いた魂を想うことも、あつてよいであろう。

#### 京都から少し遠出して

ここに記したようなことは、加筆が容易である。大阪市にいて和歌を成章と交わし、また古代音韻の問題を宣長と論争した上田秋成あきなりは、晩年を京都に移り住んで京都御苑清和院門近くの友人宅に斃れた。福井県小浜市の東条義門とうじょうは、東本願寺で勉学し、真敬寺で死の床に就いた。漢学ではあるが、頼山陽らいざんやうがいた。近代ではあるが、新村出しんむちがいた。ここに記さなかったのは、紙幅にも執筆時間にも余裕を得られなかったからに過ぎない。なお、京都市街の碑の姿・所在については、次のウェブサイトで充実している。

京都歴史資料館情報提供システム [http://www.city.kyoto.jp/somu/rekishi/fm/\\_index.html](http://www.city.kyoto.jp/somu/rekishi/fm/_index.html)

京都から少し遠出して、訪ね歩きたいところどころは多い。在来電車の日帰りという範囲では、

三重県で、松阪市の宣長には触れた。伊勢市に荒木田盛徴あらかたもりかず・盛員もりかず父子がいる。津市に谷川士清たにがわががいる。

滋賀県で、近江八幡市の蒿蹊には触れた。学問のありかたとして、高島市に中江藤樹なかえとうじゆががいる。藤樹は蒿蹊が主著『近世畸人伝』で第一に置いた人物であり、蒿蹊は、近江八幡市で商売を営みながら、琵琶湖対岸に想いを馳せていたのかもしれない。

大阪府・兵庫県で、大阪市・尼崎市の契沖けいちゆうを挙げなければならぬ。

福井県で、小浜市の義門の名をいま出した。また伴信友ばんのぶともががいる。敦賀市に橋本進吉はしもとががいる。

などなど。全国各地で、小文のような試みができそうに思う。